くらし考

――木山 啓子さんと

■ 悲しみに沈む人への手助けとは

生きる力を信じ 上からではなく 下から支える

自然災害や紛争によって、大切な「すべて」を一瞬で失う。悲しみにうずくまる背中に何ができるのか――。世界中の難民を支えて17年目。国際ボランティア組織のリーダーが、経験からたどりついた〝援助〟とは。

――なぜ、この世界へ？

偶然です。大学を出て就職した会社で、男性との昇給差を目の当たりにして「女性も同等に」と訴えたけれど果たせなかった。そこで女性学を学ぶために米国へ留学したんです。でも帰国後に勤めた企業で〝戦力外通告〟。落ち込んで引きこもっていた30代前半、知人の紹介で国際医療ボランティアの団体に雇われました。月給7万円でネパールに赴任した時は「こんな私でいいの？」。自己否定の塊でした。

半年後の1994年、内戦中の旧ユーゴスラビアへ異動することに。現地入りした日本の6団体がつくる「JEN」の統括責任者を任されました。戦時下の空港なのに花が咲き乱れ、ネパールの貧困とのギャップに拍子抜けしました。ただそこで、「難民」とはどういう状態なのかが見えてきた。

その人にとっての〝失ったもの〟が大きすぎて動けなくなることではないかと。幸せを見失ってしまうのです。

――「一人ひとりが等しく尊い」との理念を掲げています。

難民の人たちは、どん底の悲しみやつらさのなかで、生きる力を奪われている。私たちは心の傷は癒やせないし、生活を元通りにすることもできないけれど、生きる力を信じ、最低限のエネルギーを取り戻す機会を用意したい。現地の人の手で続けられるプロジェクトで、上から助けるのではなく下から支えるのが私たちの仕事です。

例えば旧ユーゴに、夫と息子を殺された母親がいました。「唯一残された娘さんにセーターを」と、同じ境遇の人が集う編み物教室へ誘うと、体がきぎるようにしてきた。3カ月後、女は完成を目標に頑張った自信と、その体を温めてやれる喜び、そして「2の家族〟とも呼べる仲間を得た。表情が明るくなり、ほかの人にもえるようになったのです。

誰かのために役立つことが、自癒やす。悲しみすぎて前に進めなくなることを恐れる必要はないと、彼女の生き方から教わりました。

――でも数年前に燃え尽きかけた。

実はずっと、「優秀な姉に比べて私は無能。人を見る目もない」と思いんでいた。ある人に「生きているだけで満点」と言われ、平等に愛されていると気づいたんです。自分をダメ人間いして元気をなくすのではなく、てて力を発揮すればいいのだ、と。

JENの年間予算は6億円。8国連や外務省の助成による委託で、19カ国で160万人以上を支援してきた。国内でも新潟県の過疎集6年間、ボランティアの調整にかり、若い移住者が出てきて活動をさせました。「タイガーマスク現象」が話題ですが、私たちが支えるのは立への過程。弱々しく踏み出す一歩が、その人の「幸せ」に向かう出発です。

（聞き手・高橋美佐子）

きやま・けいこ　1960年生まれ。2000年からNPO法人「JEN」理事・事務局長。近著「誰かのためなら人はがんばれる」。